

守護奉行人奉書に関する基礎的考察

著者	三宅 克広
出版者	法政大学史学会
雑誌名	法政史学
巻	40
ページ	42-58
発行年	1988-03-24
URL	http://hdl.handle.net/10114/10311

守護奉行人奉書に関する基礎的考察

三宅 克 広

一

室町幕府が畿内近国の有力守護に対して、在京原則を義務づけたことにより、守護は京都に屋形を構え、將軍への近侍、幕政への参加をすることになる。その際に、守護は自分の膝下に奉行人を置いたことは周知のとおりである。

さて、この守護奉行人（以後は奉行人と略す）は、室町幕府奉行人奉書と同じ書式、もしくはそれに酷似した書式の守護奉行人奉書（以後は奉行人奉書と略す）を發給している。

古くに活字化された文書集では、本来、守護奉行人奉書と名付けるべきものを幕府奉行人奉書と誤認している例がまま見受けられる。両者の書式上の類似と相違は、ごく簡

単にはあるが、夙に説明されてきたところである。⁽³⁾この説明で十分と言えないのはもちろんであるが、基本的な書式を除いて、各守護によってその書式はまちまちであるうえ、一守護家のものでも、時代をおって変化しているの⁽⁴⁾で、それらを統一的に説明するのは困難である。本稿においても、奉行人奉書について、全国的レベルで時代の変遷等を考察することはできないので、南北朝期から室町期の播磨守護赤松氏に限定して言及することにする。

さて、奉行人奉書については、宮島敬一氏の指摘に啓発されることが大である。宮島氏の奉行人奉書の書式に関する指摘の要点は、次のようである。

- ① 折紙であること（堅紙の例はない）
- ② 書き下し年号をもつこと

③ 奉行人は二名連署であること

④ 実名書きであること

⑤ 署名は目下ではなく、別行であること

但し、これは戦国期の近江六角氏についての諸特徴である。そこで、赤松氏の奉行人奉書の書式について、以下に述べることにしたい。

管見の限りでは、当該期の播磨国内に関する奉行人奉書と考えられるものは、一〇二通現存している(但し、正文のある案文、または同一文言の案文は一通とみなした)。赤松氏の奉行人奉書には、在京奉行人の発給したものと在国奉行人のそれ、さらには守護代内奉行人のそれとが確認される。在京奉行人奉書は前稿にて一覽表を掲載しておいたので、本稿では、在国奉行人と守護代内奉行人の奉書の一覽を末尾に掲載しておく(本文中掲載史料末尾の○内番号は、この一覽表に対応する)。

南北朝期から室町期の播磨守護赤松氏奉行人奉書の書式の特徴は、以下のようなになる。

① 署判

(ア) 堅紙奉書……官途書き

(イ) 折紙奉書……実名書き 目下にはなく別行(但し、

書下年号でない場合には、目下にくることもある)

守護奉行人奉書に関する基礎的考察(三宅)

② 年号

(ア) 堅紙奉書……書下年号

(イ) 折紙奉書……書下年号 付年号の併用

③ 書止文言

(ア) 堅紙奉書……「〽之由候也、仍執達如件、」・「〽之状如件、」

(イ) 折紙奉書……「〽之由候也、仍執達如件、」・「〽候、恐々謹言、」・「〽之由候也、恐々謹言、」・「〽之状如件、」

ごく簡略に言えば、堅紙奉書の書式が一定であるのに対して、折紙奉書は比較的柔軟に、その場に応じて対応しており、書式がそれほど定まっていない。堅紙奉書の場合、「東寺供僧御中」・「一宮神官中」・「石造庄^{本所}政所」などのように、その文書による受益者が宛て所となっているケースが多いようである。これは堅紙奉書と折紙奉書の使いわけによると考えられる。しかしながら、遵行使、あるいは赤松氏奉行人の宛て所を持つ堅紙奉書や「当庄政所」宛ての折紙奉書も存在しており、明確な使いわけは不明というほかなく、とりあえず事実の指摘にとどめておきたい。

二

従来、幕府奉行人奉書と守護奉行人奉書が酷似していることは、再三指摘されている。これまで幕府奉行人奉書の書式については、以下のような説明がなされてきた。⁽⁷⁾

堅紙―書下年号―官途書き―「」所被仰下也、仍執達如件、

折紙―付年号―実名書き―「」被仰出候也、仍執達如件、

しかし、最近、初期の幕府奉行人奉書について、次のようなものが紹介されている。

二尊院雑掌良勝申備前国金岡庄東方田地事、書狀如此、早可被出对之由候也、仍執達如件、

康永二年十月十九日

(門裏)
寂意 (花押)

(裏尾)
宏昭 (花押)

額安寺雑掌⁽⁸⁾

この文書は折紙であり、守護奉行人奉書の諸特徴を備えているので、一見すると守護奉行人奉書と文書名をつけそ⁽⁹⁾うである。この文書について、上島有氏は次のように述べられている。

ここに署名をした門真寂意・飯尾宏昭の二人は幕府奉行人であって、この文書は室町幕府奉行人連署奉書である。これは備前国金岡庄に関する二尊院との相論に關して、額安寺雑掌に出頭を命じた召文である。差出書が日付の次行になっているが、これは折紙であって天地の幅が狭く、日付の下に書けないのでこのようになったが、本来は「寂意(花押)」は日付の下にくるべきものである。

そして、その特色を次の三点にまとめられている。

- (1) 書止めは、「……之由候也、仍執達如件」となる。
- (2) 料紙は折紙を用いる。

- (3) 折紙の奉行人奉書は年付が付年号になるのが普通であるが、この場合はとくに書下年号である。

また、今谷明氏も、このような初期の幕府奉行人奉書について言及されている。⁽¹⁰⁾

こうなると、幕府奉行人奉書と守護奉行人奉書との区別は、書式のみを問題にすると、全く区別がつかない結果となる。

ただ、上島・今谷両氏の成果からは、こうした書式の幕府奉行人奉書は、召文・問状のみに使用され、使用年代は、暦応三年四月二十三日(初見)から、応永十九年六月十二

日を最後として、応永二十五年末には、書下年号ではなく付年号に定着し、さらには、その場合、折紙、実名書きのものしか存在しない、ということになる。

さて、ここで幕府奉行人奉書を網羅的に蒐集し、集大成した『室町幕府文書集成 奉行人奉書編』に収載されている一点の文書について、検討してみたい。その文書とは、次のものである。

(7) 播磨国志染保大村一族跡事、自 天竜寺、被申以前儀、可沙汰渡之旨、所被仰出也、早可被沙汰付下地於寺家雑掌之由候、仍執達如件、

応永廿九年十月九日 左衛門尉判

対馬 守判

小河備中入道殿^(支助)⁽¹²⁾

これに関連した文書が他に三点存在している。これらは、まだ活字化されていない史料であるので、以下に引用しておく。

(1) 天竜寺領播磨国志染保内大村一族等跡所職事、任当知行之旨、可被置寺家雑掌所務之由、所被仰下也、仍執達如件、

応永廿九年十月廿六日

(畠山道端)
沙弥判

赤松大膳大夫入道殿^(義則)⁽¹³⁾

守護奉行人奉書に関する基礎的考察 (二三七)

(ウ) 志染保大村一族等跡之事、任去九日施行之旨、所沙汰付下地天竜寺雑掌也、仍渡状如件、

応永廿九年十月廿七日

(貞政カ)
左衛門尉判
小河(支助) 沙弥判

当庄々主禪師……⁽¹⁴⁾⁽¹⁵⁾

(エ) 志染保内大村一族等跡事、可沙汰付天竜寺雑掌由、被仰下候、此分地下へ可被相触由候、恐々謹言

十月廿七日

(貞政カ)
貞政判
玄助判

石野次郎左衛門尉殿……⁽¹⁵⁾⁽³⁾

(イ) は、室町幕府管領八畠山道端ノ奉書で、(ウ)・(エ) は、それぞれ播磨国守護在国奉行人渡状・同奉書である。遵行の順序としては、(イ) ↓ (7) ↓ (ウ)・(エ) となるはずであるが、日付を編年によると、(7)・(イ)・(ウ)・(エ) となる。これらはすべて写しであり、(イ) もしくは(7) の月か日かが誤写されたものと考えられる。注目すべきは、(ウ) の文書中の「任去九日施行之旨」の文言である。「去九日施行」とは、(7) を指すものと考えられる。書式のみで判断すれば、(7) が前述の上島・今谷両氏の指摘の幕府奉行人奉書と考えることもできるが、この一連の遵行の流れと遵行文言から判断する限り、(7) は赤松氏の在京奉行人奉書と考えるのが適切であろう。

このように、幕府奉行人奉書に詳しいとされる今谷氏においてさえ、守護奉行人奉書との判別に誤りを犯されているのである。となれば、より一層、両者の判別には、細心の注意を払う必要がある。

とりあえず、本稿では幕府奉行人奉書と守護奉行人奉書との判別の要点として、以下の五点を指摘しておく。

- (一) 端裏書の確認
- (二) 堅紙奉書で、「之由候也、仍執達如件」の書止文言のものは、守護奉行人奉書である⁽¹⁷⁾
- (三) 遵行文言や施行・遵行の順序の確認

四 内容からの判断

- (四) (一)～(三)で判明した守護奉行人の名前（あるいは幕府奉行人の名前）で区別

以上のような点に注意しつつ、両者を正確に判別することとが、守護奉行人の研究を進める際の基礎的作業となると、いうことを強調しておきたい。

三

在京奉行人奉書の宛て所は、南北朝期には、守護代・守護使などになっていたが、明徳年間以降、小河氏に宛てられた奉行人奉書が多く見られるようになる。この小河氏は、

「播磨小河文書」によれば、赤松氏より国衙眼代（御代官）に補任されている事実が知られる。岸田裕之氏は、この小河氏に關して、同時期に宇野氏と併存する守護代であり、小河氏は宇野氏より領国支配機構上、有位な立場にあるとして、小河氏＝上位守護代、宇野氏＝下位守護代であると主張された⁽¹⁸⁾。また、伊藤邦彦氏は、岸田説の上位守護代・下位守護代論を否定しつつ、両者の分掌権限の相違について論述された⁽¹⁹⁾。以下本章では、この両氏の論述を中心として、行論してみたい。

まず、次の史料を見ていただきたい。

- (1) 播州荏胡麻商買事、先度就被尋下之、去五月廿五日請文并佐用中津河商人等訴状之趣、令披露畢、而近年背旧例、買取巨多之由申候間、沙汰次第山崎神人方被仰之處、重申状如此、^{書銘}封裏遣之、所詮於荏胡麻商買者、向後可任先規旨、可被相触之、次去年留置国胡麻三石余事、可返渡彼神人方之段、可被申付之由候也、仍執達如件、

応永十八年七月十九日

(上原)

性祐(花押)

(富田)

宗真(花押)

小河新左衛門入道殿⁽²⁰⁾
(支助)

播州ムク代小河新左衛門入道

相奉行黒田入道

兩人書下狀

當國在胡麻商賈事，就先度注進，去月十九日重御書下，并大山崎神人方申狀如此案文。封裏遺之早任被仰下之旨，可止向後遑亂之由，佐用中津河以下商人等可相觸之，次去年國留置胡麻三石余事，不日神人方へ可返渡旨，申付之，可被申左右之由候也，仍執達如件。

応永十八年八月三日

(黒田)

源勝(花押)

(小河)

玄助(花押)

渋谷三郎左衛門入道殿……①

史料(2)は、「去月十九日重御書下并大山崎神人方申状如此」とあるように、(1)の在京奉行人奉書を受けて発給されたものである。(1)の宛て所の小河新左衛門入道は、応永五年(一三九八)に赤松氏より国衙眼代職に補任されており、(2)の押紙にも、「播州ムク代小河新左衛門入道」と記されている。また、岸田氏は、小河氏の先祖は鎌倉初期に播磨国に土着し国衙在庁になっていたこと、文和年間頃には播磨国小目代となっていたこと、赤松氏はその小目代を国

衙眼代職に補任し守護代とすることによって国衙機構を吸収していくことなどを主張された。これらのことにより、岸田・伊藤両氏は、小河氏の立場を赤松氏に被官化された国衙眼代としてのみとらえようとされた。が、本稿では(2)に見られるように、小河氏は、在京奉行人奉書と同様の書式の文書を発給していることに注目したい。

次の史料は、小河氏を「奉行」と表現している唯一のものである。

次の史料は、小河氏を「奉行」と表現している唯一のもの

(3) 『教言卿記』 応永十二年十月二十五日条

(義則)

一、細川反錢事、以資興赤松方^ハ愁申之処、雖可聞
申、為大塔事之間不可叶、且先規雖遁在所[□]皆悉
可懸之由被成御教書云、次貧錢[□]下知^ハ奉行小
河^二可被仰之由返答、申次^ハ²³²²²¹²⁰¹⁹¹⁸¹⁷¹⁶¹⁵¹⁴¹³¹²¹¹¹⁰⁹⁸⁷⁶⁵⁴³²¹⁰⁻¹⁻²⁻³⁻⁴⁻⁵⁻⁶⁻⁷⁻⁸⁻⁹⁻¹⁰⁻¹¹⁻¹²⁻¹³⁻¹⁴⁻¹⁵⁻¹⁶⁻¹⁷⁻¹⁸⁻¹⁹⁻²⁰⁻²¹⁻²²⁻²³⁻²⁴⁻²⁵⁻²⁶⁻²⁷⁻²⁸⁻²⁹⁻³⁰⁻³¹⁻³²⁻³³⁻³⁴⁻³⁵⁻³⁶⁻³⁷⁻³⁸⁻³⁹⁻⁴⁰⁻⁴¹⁻⁴²⁻⁴³⁻⁴⁴⁻⁴⁵⁻⁴⁶⁻⁴⁷⁻⁴⁸⁻⁴⁹⁻⁵⁰⁻⁵¹⁻⁵²⁻⁵³⁻⁵⁴⁻⁵⁵⁻⁵⁶⁻⁵⁷⁻⁵⁸⁻⁵⁹⁻⁶⁰⁻⁶¹⁻⁶²⁻⁶³⁻⁶⁴⁻⁶⁵⁻⁶⁶⁻⁶⁷⁻⁶⁸⁻⁶⁹⁻⁷⁰⁻⁷¹⁻⁷²⁻⁷³⁻⁷⁴⁻⁷⁵⁻⁷⁶⁻⁷⁷⁻⁷⁸⁻⁷⁹⁻⁸⁰⁻⁸¹⁻⁸²⁻⁸³⁻⁸⁴⁻⁸⁵⁻⁸⁶⁻⁸⁷⁻⁸⁸⁻⁸⁹⁻⁹⁰⁻⁹¹⁻⁹²⁻⁹³⁻⁹⁴⁻⁹⁵⁻⁹⁶⁻⁹⁷⁻⁹⁸⁻⁹⁹⁻¹⁰⁰⁻¹⁰¹⁻¹⁰²⁻¹⁰³⁻¹⁰⁴⁻¹⁰⁵⁻¹⁰⁶⁻¹⁰⁷⁻¹⁰⁸⁻¹⁰⁹⁻¹¹⁰⁻¹¹¹⁻¹¹²⁻¹¹³⁻¹¹⁴⁻¹¹⁵⁻¹¹⁶⁻¹¹⁷⁻¹¹⁸⁻¹¹⁹⁻¹²⁰⁻¹²¹⁻¹²²⁻¹²³⁻¹²⁴⁻¹²⁵⁻¹²⁶⁻¹²⁷⁻¹²⁸⁻¹²⁹⁻¹³⁰⁻¹³¹⁻¹³²⁻¹³³⁻¹³⁴⁻¹³⁵⁻¹³⁶⁻¹³⁷⁻¹³⁸⁻¹³⁹⁻¹⁴⁰⁻¹⁴¹⁻¹⁴²⁻¹⁴³⁻¹⁴⁴⁻¹⁴⁵⁻¹⁴⁶⁻¹⁴⁷⁻¹⁴⁸⁻¹⁴⁹⁻¹⁵⁰⁻¹⁵¹⁻¹⁵²⁻¹⁵³⁻¹⁵⁴⁻¹⁵⁵⁻¹⁵⁶⁻¹⁵⁷⁻¹⁵⁸⁻¹⁵⁹⁻¹⁶⁰⁻¹⁶¹⁻¹⁶²⁻¹⁶³⁻¹⁶⁴⁻¹⁶⁵⁻¹⁶⁶⁻¹⁶⁷⁻¹⁶⁸⁻¹⁶⁹⁻¹⁷⁰⁻¹⁷¹⁻¹⁷²⁻¹⁷³⁻¹⁷⁴⁻¹⁷⁵⁻¹⁷⁶⁻¹⁷⁷⁻¹⁷⁸⁻¹⁷⁹⁻¹⁸⁰⁻¹⁸¹⁻¹⁸²⁻¹⁸³⁻¹⁸⁴⁻¹⁸⁵⁻¹⁸⁶⁻¹⁸⁷⁻¹⁸⁸⁻¹⁸⁹⁻¹⁹⁰⁻¹⁹¹⁻¹⁹²⁻¹⁹³⁻¹⁹⁴⁻¹⁹⁵⁻¹⁹⁶⁻¹⁹⁷⁻¹⁹⁸⁻¹⁹⁹⁻²⁰⁰⁻²⁰¹⁻²⁰²⁻²⁰³⁻²⁰⁴⁻²⁰⁵⁻²⁰⁶⁻²⁰⁷⁻²⁰⁸⁻²⁰⁹⁻²¹⁰⁻²¹¹⁻²¹²⁻²¹³⁻²¹⁴⁻²¹⁵⁻²¹⁶⁻²¹⁷⁻²¹⁸⁻²¹⁹⁻²²⁰⁻²²¹⁻²²²⁻²²³⁻²²⁴⁻²²⁵⁻²²⁶⁻²²⁷⁻²²⁸⁻²²⁹⁻²³⁰⁻²³¹⁻²³²⁻²³³⁻²³⁴⁻²³⁵⁻²³⁶⁻²³⁷⁻²³⁸⁻²³⁹⁻²⁴⁰⁻²⁴¹⁻²⁴²⁻²⁴³⁻²⁴⁴⁻²⁴⁵⁻²⁴⁶⁻²⁴⁷⁻²⁴⁸⁻²⁴⁹⁻²⁵⁰⁻²⁵¹⁻²⁵²⁻²⁵³⁻²⁵⁴⁻²⁵⁵⁻²⁵⁶⁻²⁵⁷⁻²⁵⁸⁻²⁵⁹⁻²⁶⁰⁻²⁶¹⁻²⁶²⁻²⁶³⁻²⁶⁴⁻²⁶⁵⁻²⁶⁶⁻²⁶⁷⁻²⁶⁸⁻²⁶⁹⁻²⁷⁰⁻²⁷¹⁻²⁷²⁻²⁷³⁻²⁷⁴⁻²⁷⁵⁻²⁷⁶⁻²⁷⁷⁻²⁷⁸⁻²⁷⁹⁻²⁸⁰⁻²⁸¹⁻²⁸²⁻²⁸³⁻²⁸⁴⁻²⁸⁵⁻²⁸⁶⁻²⁸⁷⁻²⁸⁸⁻²⁸⁹⁻²⁹⁰⁻²⁹¹⁻²⁹²⁻²⁹³⁻²⁹⁴⁻²⁹⁵⁻²⁹⁶⁻²⁹⁷⁻²⁹⁸⁻²⁹⁹⁻³⁰⁰⁻³⁰¹⁻³⁰²⁻³⁰³⁻³⁰⁴⁻³⁰⁵⁻³⁰⁶⁻³⁰⁷⁻³⁰⁸⁻³⁰⁹⁻³¹⁰⁻³¹¹⁻³¹²⁻³¹³⁻³¹⁴⁻³¹⁵⁻³¹⁶⁻³¹⁷⁻³¹⁸⁻³¹⁹⁻³²⁰⁻³²¹⁻³²²⁻³²³⁻³²⁴⁻³²⁵⁻³²⁶⁻³²⁷⁻³²⁸⁻³²⁹⁻³³⁰⁻³³¹⁻³³²⁻³³³⁻³³⁴⁻³³⁵⁻³³⁶⁻³³⁷⁻³³⁸⁻³³⁹⁻³⁴⁰⁻³⁴¹⁻³⁴²⁻³⁴³⁻³⁴⁴⁻³⁴⁵⁻³⁴⁶⁻³⁴⁷⁻³⁴⁸⁻³⁴⁹⁻³⁵⁰⁻³⁵¹⁻³⁵²⁻³⁵³⁻³⁵⁴⁻³⁵⁵⁻³⁵⁶⁻³⁵⁷⁻³⁵⁸⁻³⁵⁹⁻³⁶⁰⁻³⁶¹⁻³⁶²⁻³⁶³⁻³⁶⁴⁻³⁶⁵⁻³⁶⁶⁻³⁶⁷⁻³⁶⁸⁻³⁶⁹⁻³⁷⁰⁻³⁷¹⁻³⁷²⁻³⁷³⁻³⁷⁴⁻³⁷⁵⁻³⁷⁶⁻³⁷⁷⁻³⁷⁸⁻³⁷⁹⁻³⁸⁰⁻³⁸¹⁻³⁸²⁻³⁸³⁻³⁸⁴⁻³⁸⁵⁻³⁸⁶⁻³⁸⁷⁻³⁸⁸⁻³⁸⁹⁻³⁹⁰⁻³⁹¹⁻³⁹²⁻³⁹³⁻³⁹⁴⁻³⁹⁵⁻³⁹⁶⁻³⁹⁷⁻³⁹⁸⁻³⁹⁹⁻⁴⁰⁰⁻⁴⁰¹⁻⁴⁰²⁻⁴⁰³⁻⁴⁰⁴⁻⁴⁰⁵⁻⁴⁰⁶⁻⁴⁰⁷⁻⁴⁰⁸⁻⁴⁰⁹⁻⁴¹⁰⁻⁴¹¹⁻⁴¹²⁻⁴¹³⁻⁴¹⁴⁻⁴¹⁵⁻⁴¹⁶⁻⁴¹⁷⁻⁴¹⁸⁻⁴¹⁹⁻⁴²⁰⁻⁴²¹⁻⁴²²⁻⁴²³⁻⁴²⁴⁻⁴²⁵⁻⁴²⁶⁻⁴²⁷⁻⁴²⁸⁻⁴²⁹⁻⁴³⁰⁻⁴³¹⁻⁴³²⁻⁴³³⁻⁴³⁴⁻⁴³⁵⁻⁴³⁶⁻⁴³⁷⁻⁴³⁸⁻⁴³⁹⁻⁴⁴⁰⁻⁴⁴¹⁻⁴⁴²⁻⁴⁴³⁻⁴⁴⁴⁻⁴⁴⁵⁻⁴⁴⁶⁻⁴⁴⁷⁻⁴⁴⁸⁻⁴⁴⁹⁻⁴⁵⁰⁻⁴⁵¹⁻⁴⁵²⁻⁴⁵³⁻⁴⁵⁴⁻⁴⁵⁵⁻⁴⁵⁶⁻⁴⁵⁷⁻⁴⁵⁸⁻⁴⁵⁹⁻⁴⁶⁰⁻⁴⁶¹⁻⁴⁶²⁻⁴⁶³⁻⁴⁶⁴⁻⁴⁶⁵⁻⁴⁶⁶⁻⁴⁶⁷⁻⁴⁶⁸⁻⁴⁶⁹⁻⁴⁷⁰⁻⁴⁷¹⁻⁴⁷²⁻⁴⁷³⁻⁴⁷⁴⁻⁴⁷⁵⁻⁴⁷⁶⁻⁴⁷⁷⁻⁴⁷⁸⁻⁴⁷⁹⁻⁴⁸⁰⁻⁴⁸¹⁻⁴⁸²⁻⁴⁸³⁻⁴⁸⁴⁻⁴⁸⁵⁻⁴⁸⁶⁻⁴⁸⁷⁻⁴⁸⁸⁻⁴⁸⁹⁻⁴⁹⁰⁻⁴⁹¹

この史料には、欠損文字があるのに加えて、「貧錢」の意味が不明のために、ここでの「奉行小河」の役割が何であるか、今一つよくわからない。

次に掲げる史料にも「奉行」が見える。

奉行下知案

(4)九条前関白家領播州田原庄・安田庄・蔭山庄段錢并人夫以下諸公事御免除之上者、可止催促之由事、去月廿五日御施行如此、可有存知此分之状如件、

永享元年十一月六日

小河 右衛門尉判
浦上 弥判
沙 弥判
櫛橋 弥判本所方政所殿……⁽²³⁾⑪

この文書は、小河氏についてのものではないが、端書に「国奉行」と記されている。この端書の「国奉行」は、九条家の人間によって書き記されたものと思われ、国内の支配機構上、この名称が使われたか否かは判然としないが、在京奉行人奉書と同じ書式の奉書を発給しているところに注目しておきたい。史料(4)は、同年九月十四日の足利義教御判御教書⁽²⁴⁾・同年十月二十五日の守護赤松満祐遵行状⁽²⁵⁾を受けて発給されたものであり、守護遵行状の宛て所に「浦上備前入道殿／櫛橋豊後入道殿」とある。この宛て所の順序は、その他の例ではすべて逆に「櫛橋豊後入道殿／浦上備前入道殿」と記されており、この場合は誤写が考えられる。史料(4)は、正文も残されており、その花押から署判者が判明するのである。それによれば、史料(4)の奥の署判者が櫛橋伊高（櫛橋豊後入道）、まん中の署判者が浦上珪寿（浦上備前入道）、日下署判は浦上信祐であることがわかる。これらの署判者は、いずれも播磨国内にいたと考えられる。「在京奉行」という呼称が当時に使われていたか否か

は不明であるが、荘園領主側の「国奉行」との認識があり、在京奉行人を全く同じ書式の奉書を播磨国内にいらながら発給している者が存在していたことは明白である。

本稿では、前述の小河玄助を含めて、在国して守護の奉書を発給する者を在京奉行人と称することにする。

さて、在京奉行人奉書の初見としては、前掲の史料(2)である。この文書の署判者である小河玄助・黒田源勝らがいつ頃から、在京奉行人としての活動を始めたのか明確にはならないが、東寺領矢野荘の算用状のなかに「坂本（奉行所）が初めて見える応永年間の初め頃と考えておきたい。⁽²⁸⁾その後、小河玄助は、永享年間まで史料上に姿を見せる。⁽²⁹⁾

前述のように、この小河玄助については、岸田・伊藤両氏によって検討がなされている。その際、岸田氏は小河氏を上位守護代として、伊藤氏は国衙眼代としてとらえ、守護代宇野氏との分掌権限を考察されている。

岸田氏は、小河氏の権限として、(イ)關所地処分の遵行、(イ)「公役」の誼責・徴収、(ウ)商業、(エ)訴訟史料の挙達、(オ)段銭の誼責・徴収とその手続事務、(カ)城郭の管轄などをあげられ、伊藤氏は、(キ)公田段銭・守護段銭及び諸公事として一括される公役（軍役を除く）の催徴の遵行、(ク)雑務沙汰権、(ケ)寺社本所領統轄権などを列挙された。特に、伊藤

氏においては、軍事指揮権・所務沙汰権・検断権などを守護代宇野氏の固有の権限として、小河・宇野両氏の分掌権限に明確に一線を画されたのである。

ところが、次に掲げるような史料が見られる。

(5)南禅寺領播磨国所々諸公事并段銭人夫以下臨時課役事、去月廿九日御教書如此、早任被仰下之旨、可被停止使者入部之状如件、

応永廿一年五月廿五日

(赤松義則)
沙弥(花押)

(6)「御教書并下知状亨」
(端裏書)

赤松肥前守殿⁽³⁰⁾

播磨国細川庄事、任御書之旨、可被沙汰付冷泉大納言家雜掌之由、所被仰下也、仍執達如件、

応永廿三年五月十八日

(細川満元)
沙弥判

赤松大膳大夫入道

(7)播磨国細河庄地頭・領家職^(除所)事、去十八日御判并御施行之旨、可被沙汰付下地於冷泉大納言家雜掌之状如件、

応永廿三年五月廿日

(赤松義則)
沙弥判

赤松肥前守殿⁽³¹⁾

一見してわかるとおり、史料(5)・(7)は守護代赤松肥前守を宛て所としており、(7)は(6)の管領施行状を遵行したもの

守護奉行人奉書に関する基礎的考察(三宅)

である。史料(5)の権限内容は、岸田・伊藤両氏があげられた(イ)・(ウ)・(エ)にあたると考え、(7)は(ウ)にあたると考えられる。

ここで視点をかえて、守護と在京奉行人との発給文書の違いを検討してみたい。

在京奉行人が活動を始めたと思われる室町初期から応永二十八年(一四二二)までをみてみると、守護→守護代宛ての文書は、そのほとんどが幕府からの施行命令を受けたものである。しかしながら、守護から在京奉行人へ宛てた文書は存在しない。在京奉行人を宛て所とした発給されるのは、すべて在京奉行人奉書であり、その中には幕府からの遵行文言を含んでいるものはないのである。

再度、前掲史料(1)・(2)をふりかえてみたい。応永十八年(一四一一)、播州荏胡麻商売について、大山崎神人と佐用中津河商人との間の争論が起っている。幕府関係の文書(御判御教書、管領施行状など)が現存していないこと、幕府からの遵行文言が含まれていないことなどから考えて、播磨守護赤松氏のもとにおいて裁許が行なわれたものと推測される。在京奉行人は訴状の旨を守護赤松義則へ「披露」し、守護より「沙汰次第」が大山崎神人に伝えられたが、神人より重申状が出された。この結果、発給され

たのが史料(1)で、それを遵行したものが史料(2)である、と私は考える。ところが、この争論はそれでもおさまりがつかず、幕府に持ちこまれたものと思われ、幕府の裁許は、現存する限りの文書では、応永二十一年(一四一四)、同二十二年に出されていることが確認できる。⁽³²⁾ その中では、「結句於彼^(備前)兩国内被官人小川新左衛門入道押取買得在胡麻云々」と述べている。⁽³³⁾

注目すべき点は、応永十八年の守護による裁許が、在京奉行人→在国奉行人(小河玄助)へ遵行されているのに対して、この幕府の裁許が、幕府(管領)→守護(赤松義則)→守護代(赤松肥前守)と遵行されていることである。もちろん、押妨の主体が守護被官人であり、在国奉行人である小河玄助当人であるというこの場合の特殊性も勘案しなければならないが、他の在京奉行人奉書・在国奉行人奉書・守護遵行状などの例をもってしても、この原則は応永二十八年までは貫かれていたのである。

次に、公用段銭・公役の催徴権に関して言及したい。確かに、小河玄助宛の在京奉行人奉書の内容としては、幕府段銭やその他の諸公事に関する催免が多数見られるし、「公田」数を彼が把握していた徴証も、岸田・伊藤両氏によって紹介されており、この公田段銭・公役の催徴権を小河玄

助が把握していたであろうことは認められるが、一方では、前掲史料(5)のように、段銭・臨時課役の免除が守護代へ遵行されているのも事実なのである。この点についても、前述のとおり、幕府からの遵行であるか否かという点を導入し検討してみよう。

当該期に、小川玄助宛て在京奉行人奉書の中に、幕府奉行人奉書を遵行しているものが見られる。⁽³⁴⁾ 幕府からの遵行という点ではこれらも含まれてしまうが、管領奉書ないしは管領施行状を遵行している事例はみられない。この時期に、小河玄助宛て在京奉行人奉書の幕府段銭に関するものは、役夫工米の免除のみである。このことは、南北朝最末期に神宮方が成立した⁽³⁵⁾ことにより、役夫工米の免除の遵行が、幕府奉行人奉書(神宮方頭人奉書)をもってなされるようになったことと関連すると考えられる。前稿においても述べたように、幕府奉行人奉書の遵行は、在京奉行人奉書→在国奉行人奉書というルートが例外なく使用されており、そのために、幕府からの遵行命令が在国奉行人小河玄助のもとへ伝達されたものと推測される。管領奉書ないしは管領施行状の遵行は、公田段銭・公役の催徴を内容としていても、守護代へ遵行されており、必ずしも在国奉行人小河玄助の専掌ではなかったと言えよう。

さらに、もう一点指摘しなければならないのは、伊藤氏の主張された「寺社本所領統轄権」なる権限である。伊藤氏の論文が発表されて以来、この聞きなれない権限についての批判は、管見の限り見あたらないので、検討してみることしよう。氏がその根拠とされた一つの史料は、次のものである。

(8) 「鶴庄引付」

(前略) 鶴同十七日、筆取舜見房、為地下作法注進寺家上洛早、寺門ニハ堅難義由評定アリテ、守護方赤松殿ニ、寺家ヨリ、九月廿六日、舜見房以寺家目安在京、折節寺官琳観房得業在京アル間、鶴テ上原殿ニ対面シ、委細歎申サル間、同九月廿八日、御書下ヲ出申サレ早、同舜見房、京ヨリ御書下ヲ所持シ十月六日庄着アリ、同十月七日、小河方エ御書下ヲ持参、鶴両使寺門方端方、折節福井ニ在庄間、鶴御出小河方状ヲ付早(後略)⁽³⁶⁾これは、応永二十五年(一四一八)に法隆寺領鶴荘で起こった逃散事件の事態収拾について記されたものである。事件の経緯は、この年の一月に寺家(法隆寺)へ在地から訴えが出され、同じく六月には、「井料、名主地上検断、百姓三分一」の三ヶ条を名主らが寺家へ再度愁訴したが、いずれも寺家側に受け入れられず、九月十五日には名主・

百姓らが逃散に及んだのである。

この事態に、在荘していた法隆寺の筆取である舜見房が寺家へ対して、「地下作法」を注進するため十七日に上洛し、やはり、寺家側では前述の三ヶ条の受け入れはできないとした。そのため、舜見房が二十八日に、琳観房得業と守護赤松氏の在京奉行人である上原殿(性祐カ)に対面し、ともに、事情を申し伝えたところ、「御書下」が発給された。この「御書下」は、守護の裁許により発給された在京奉行人奉書で、宛て所は小河玄助となっていたと考えられる。この奉書を携えた舜見房は、十月七日に在国奉行人の小河玄助方へ行き、守護使宛ての在国奉行人奉書を作成してもらったのである。

伊藤氏はこの史料をもって小河玄助の「寺社本所領統轄権」を説かれたのである。しかし、この一連の動きは、まさに遵行がいかなるシステムによって履行されるのかを物語っている。⁽³⁷⁾つまりこれらの人間の動き——特に寺家側の舜見房の動き——は、他に現存している文書のすべてにおいて行なわれたものであって、何故、筆取舜見房が小河玄助に「御書下」を持ちこんだか、という問いには、在国奉行人は在京奉行人を経て、守護の裁許を遵行する立場にあったから、と答えるのが妥当と思われる。他に、伊藤氏が「寺社

本所領統轄権」の論拠に挙げられた史料も、すべて守護の裁許を遵行したものである。更に付言すれば、播磨国内に蟠踞した有力国人の伝えた文書は数多く残っており、播磨国に関する文書・記録類は、総じて寺社関係、あるいは京都の貴族が伝えたものである。寺社・公家関係の文書・記録のみをもって分掌権限を論述すれば、すべて「寺社本所領統轄権」に帰結すると考えられる。

以上のことからすると、当該期に守護代宇野氏と在国奉行人小河玄助との国内における機能的差異は、前者が幕府からの施行命令を受けた守護遵行状の遵行を行なうのに対して、後者は守護独自の裁許や命令の遵行を行なう傾向にあるというように理解するのが妥当と考えられる。

さて、応永二十九年（一四二二）以降、在国奉行人はどのような権限を有するのであろうか。

次掲史料を見ていただきたい。

(9) 天竜寺雑掌与八徳八葉寺雑掌相論播磨国菖蒲谷山事、於

畑畠栗林在家者、八葉寺当知行之、至柴木者、天竜寺領百姓採用由事、去二日御教書如此、早任被仰下之旨、可被相触之状如件、

応永廿九年三月廿二日

赤松殿義則

沙弥判

小河備中入道殿

これは、文書中に「去二日御教書如此」と記されているように、幕府管領奉書(39)を遵行したものである。つまり、応永二十八年以前には見られなかった幕府からの施行命令を在国奉行人の小河玄助が遵行しているのである。同様の例は応永三十四年（一四二七）(40)、永享六年（一四三四）(41)にも見られる。また小河玄助が没落中には、前掲史料(4)の署判者である浦上備前入道伊高、櫛橋豊後入道珪寿らが在国奉行人としてあらわれるが、彼らもまた幕府（管領奉書、管領施行状）からの施行命令を遵行しているのである。(43) しかも、史料(5)では守護代へ遵行した段銭、課役の免除についても、この時期には在国奉行人が遵行しているのである。(44) さらに、前稿でふれたが、応永二十九年（一四二二）には、幕府管領奉書（あるいは管領施行状）を遵行した「外宮段銭、要脚段銭」の在国奉行人による配符状が残されている。(45)

しかしながら、依然として守護から守護代への遵行状も残っており、幕府からの施行命令のすべてを在国奉行人が管掌したのではないようである。

以上のことより、以前には在国奉行人の管掌事項でなかった幕府からの施行命令の遵行の一部を当該期には在国奉行人が掌握したといえることが言えよう。ただし、史料的制作方法があり、守護代へ遵行する場合と在国奉行人へ遵行する

場合、何によって相違したのか——例えば、遵行内容によって二ルートが使い分けられたのかなど——を明らかにすることはできない。これらの少ない事例をもって、にわか論述することは避けなければならないが、かつて、守護代が専掌していた事項を在国奉行人が管轄するようになったことは、国内における在国奉行人の権限の増大、ひいては守護代に対する在国奉行人の相対的地位の上昇⁴³守護代の相対的地位の低下⁴⁴ということが考えられる。本稿で、在国奉行人の権限の検討の際に、応永二十八年を区切りとしたのは便宜的なものであったが、この応永年間の終わり頃を境として、前稿において指摘した在京奉行人の地位の上昇が考えられ、在国奉行人の場合と軌を一にしていると言えよう。再三述べてきたように両者の間には、密接な関係があると考えられるため、在国奉行人の権限の増大については、かなりの蓋然性を有していると思われる。

四

さて、この在国奉行人の地位の相対的上昇は、守護支配機構にとって、どのような変化をもたらしたであろう。

その一つは、これまでも岸田・伊藤両氏の明らかにしてこられた「納所」の成立、それへの小河玄助・上原備中入

道（備後守）の就任である。この両者は、ともに坂本の在国奉行人である。⁽⁴⁸⁾

今一つは、これも岸田・伊藤両氏の説いてこられた「国⁽⁴⁹⁾之検断奉行」の成立である。当然のことながら、この検断奉行も在国奉行人であると思われる。

この新しい機構の創出は、おそらく正長元年（一四二八）十月からの播磨国の土一揆を経験した守護赤松氏が、その管国支配機構を整備し、より強力な支配を志向したところに、在国奉行人の抬頭をからませて行なったものと言えよう。

佐藤和彦氏の研究によれば、それまで荘園領主や地頭・荘官らに向けられていた農民の段銭反対闘争が、応永末年頃から守護権力へ向けられはじめる、という。それに対抗し、守護は前述のような支配機構の再編、強化を行ない、また、荘園領主は農民の要求によって、段銭免除あるいは段銭京済を幕府へ訴える。そのことが幕府内部の將軍と管領をはじめとする諸大名の矛盾を激化させていき、たどりついたところが嘉吉の乱であったと考えられる。

註

(1) 石田善人「室町幕府論」（清水盛光・会田雄次編『封建国家の権力構造』（創文社、一九六七）

(2) 守護年寄衆(老臣) 奉書などとも呼ばれるが、本稿で扱う時期については「年寄衆(老臣)」とは、史料上一点も見られないので、奉行人奉書と統一することにする。これは奉行人に関しても同様である。赤松氏については、太田亮『姓氏家系大辞典』(角川書店、一九六三)の赤松の項所引の「赤松家風条々事」に「当万年寄衆」として人名があげられているが、これは後の史料であると思われる。

(3) 相田二郎『日本の古文書』上巻(岩波書店、一九四九)、四五九〜六〇頁にある「守護大名年寄奉行奉書」の項において、幕府奉行人奉書と同形式のものを紹介した上で、近江六角定頼の年寄奉書(大永五年九月二十五日)を例示し、折紙であるにもかかわらず、書下年号を使用しているとして、「この佐々木氏奉行の奉書は、模倣してもどこに地方大名としての特色を表してゐると見るべきであらう」と指摘している。

近年の古文書学の研究においても、書式の点においては、ほぼ相田氏の記述をそのまま踏襲している。例えば、田代脩「守護大公文書」(『日本古文書学講座』四「雄山閣出版、一九八〇年」、一六九頁、日本歴史学会編『概説古文書学 古代・中世編』(吉川弘文館、一九八三)、一三六〜八頁(新田英治氏執筆部分)など参照。

但し、それらの記述も、例示する文書は、戦国期のものや、それに近い時期のものが多く、十四世紀以前については、あまりふれられていない。そのため、奉行人奉書の発

生や南北朝・室町初期の奉行人奉書については、未解明の部分が多いと考える。

(4) 宮島敬一「戦国期における六角氏権力の性格——発給文書の性格を中心にして——」(『史潮』新五、一九七九)

(5) 拙稿「播磨守護赤松氏奉行人の機能に関する一考察」(『古文書研究』二十八、一九八七)。本稿と深くかわるので、参照されたい。以下、前稿とはこの論文を指す。

(6) 但し、国学院大学久我家文書編纂委員会編『久我家文書』第一卷一七九号文書(八永享三年〇七月六日)の奉行人連署奉書は、発給者が実名であるにもかかわらず、堅紙が使用されている唯一の例外である。

(7) 相田氏著書(前掲註3)、四五三〜七頁、佐藤進一『古文書学入門』(法政大学出版局、一九七二)、一六六〜七頁

(8) 「二尊院文書」一

(9) 上島有「室町幕府文書」(『日本古文書学講座』四「前掲」、一〇六頁)

(10) 今谷明「室町幕府奉行人奉書の基礎的考察」(『国立歴史民俗博物館研究報告』一、一九八二、のち同「室町幕府解体過程の研究」(岩波書店、一九八五)所収)

(11) 高橋康夫・今谷「室町幕府文書集成 奉行人奉書篇」上(思文閣出版、一九八六)、一〇七号

(12) (13) (14) (15) 「天竜寺重書目録」乙

(16) もし、(7)を幕府奉行人奉書と考えた場合、(6)の遵行文書は通例では「御奉書」になるはずである。

(17) 管見の限り、幕府奉行人奉書において、堅紙、かつこの書止文言をもつものは見ることができない。

(18) 岸田裕之「守護赤松氏の播磨国支配の発展と国衙」『史学研究』一〇四・一〇五、一九六八、のち同『大名領国の構成的展開』(吉川弘文館、一九八三)所収。なお、岸田氏著書については、内山俊身・三宅克広「書評岸田祐之著『大名領国の構成的展開』」『法政史学』三十六、一九八四)で若干コメントをしている。

(19) 伊藤邦彦「播磨守護赤松氏の△領国△支配」『歴史学研究』三九五、一九七三

(20) (21) 「離宮八幡宮文書」(『島本町史』史料編七五・七六号)。その他に関係文書として七七・七八号があげられる。

(22) 『教言卿記』(史料集)応永十二年十月二十五日条

(23) 『九条家文書』(図書寮叢刊)二一三七八(3)。

(24) (25) 『九条家文書』二一三七八(1)・(2)

(26) 『九条家文書』二一四四九

(27) 小河玄助(字は助行)が在京奉行人とともに署判をしている文書が以下の二点存在している。

i) 明徳四年七月二十日守護奉行人(寛頼・助行)連署奉書

『伊和神社文書』一、『大日本史料』七一・二五一頁)

ii) 応永六年四月八日 相国寺年貢所納状(円尾光所蔵文書)『龍野市史』四、四七三頁)

i) は美作国栗井荘に関する文書。ii) はこの文書の袖に、(阿間) 貞言・(小河) 助行・(富田) 宗真が外題と

守護奉行人奉書に関する基礎的考察(三宅)

もに加判しているものである。『龍野市史』は、それぞれ「貞久・助行・兼久」と読んでいるが、高坂好「赤松円心・満祐」(吉川弘文館、一九七〇)の一六〇頁所載の写真の花押により、読み改めた。

小河玄助と在京奉行人の連署については、小河が在京する時期があったのか、在京奉行人が国へ下向したのかは、その逐一を史料上において、確認することはできないが、「一見老友記」(註29参照)には、明徳元年八月十六日に赤松方奉行人の喜多野奄岐入道(性守)の播州下向の記事が見えていることなどからして、筆者は後者の可能性を考えている。

(28) 「東寺百合文書」ヲ函三五(数字は京都府立総合資料館編『東寺百合文書目録』(吉川弘文館、一九七六・九)の文書番号を示し、法政大学架蔵写真版によった。以下、「東百」ヲ三五と略記する)

(29) 米田(現高砂市・加古川市)定願寺の僧鎮増が記したとされる「一見老友記」(『姫路市史』三)には、永享八年(一四三六)二月十七日に小川玄助の死没記事が記されており、その他にも、玄助に関する記述が散見する。

(30) 桜井景雄・藤井学編『南禅寺文書』上——〇九

(31) 以上の二通は、『菊亭文書』十六(『大日本史料』七一・二四、三八二・三頁)

(32) 「離宮八幡宮文書」(『島本町史』史料編八三・八六号)。

但し、八六号は播磨守護赤松義則遵行状であり、その中に

「今月十一日御教書」と記されており、これが管領施行状を指すと考えられる。

- (33) 前註八三号
- (34) 「東百」く五 東寺廿一口方評定引付九月三日条(『大日本史料』七―一三、三八三―四頁)
- (35) 百瀬今朝雄「段銭考」(『日本社会経済史研究』中世編、吉川弘文館、一九六七)
- (36) 「鶴庄引付」(『太子町史』史料編、一〇八―九頁)、「古代取集記録」(阿部猛・太田順三編『播磨国鶴庄資料』〔八木書店、一九七〇〕一二―三頁)
- (37) 例えば、『概説古文書学 古代・中世編』(前掲) 一一四頁(上島有氏執筆部分)を参照。
- (38) 「天竜寺重書目録」乙
- (39) 「天竜寺重書目録」乙
- (40) 『大日本古文書 大徳寺文書』一一一九九(5)
- (41) 「東百」ち二〇、東寺廿一口方評定引付九月二十三日条(『大日本古文書 東寺文書』三、一〇一―三頁)
- (42) 前掲伊藤氏論文を参照。
- (43) 『九条家文書』二―四四八、「久我家文書」一一一七八、「九条家文書」二―三七九(1)、奈良国立文化財研究所編『東大寺文書目録』一(同明舎、一九八〇)、三二六頁、播磨国大部荘関係文書一―〇二(2)
- (44) 史料(5)は、「可被停止使者入部」、前註の史料は、「可令停止催促」と若干文言に差異があり、これを問題にすること
- も可能と思われるが、本稿では両者を同意に考えている。
- (45) 「東百」よ一一三
- (46) 『九条家文書』二―五二八
- (47) その他にも、次のような史料がある。
- 守護給符案
- 播磨矢野庄若狹野村上野法師跡名田畠^{本年貢以下除之}事、為給分、所被預置糟屋三郎左衛門尉也、可沙汰下地於給人由事、去月廿四日御奉書如此、早任被仰下之旨、可沙汰渡当給人之状如件、
- 永享七年三月六日 誠言判
- 景貞判
(小河) 玄助判
- 島津加賀守殿……⑭
- 「東百」く一四、東寺廿一口方評定引付三月十八日条
- これは、伊藤氏が守護代の権限の一つにあげられた雑務沙汰権から派生する嗣所地処分に伴う預置遵行権を在国奉行人が行使しているものである。
- (48) 「東百」ヲ七六(一)に、「坂本小河・安保・上原方」とある。
- (49) 「国之検断奉行」を史料上で確認しうるのは、「東百」く一五、東寺廿一口方評定引付五月十三日条の「自去年、検断奉行浦上^{二字空白}方」と、岸田氏も論文中に引用されている「東百」ち一一、東寺廿一口方評定引付二月二十三日条(『大日本古文書 東寺文書』四、三頁)の「浦上三郎国之検断

播磨守護赤松氏在国奉行人奉書一覽表

奉行之間」の二点である。これより、検断奉行の設置は、少なくとも永享七年（一四三五）まではさかのぼりうる。伊藤氏は、その成立を永享五年頃と推定されているが、根拠は示されていない。

(50) 佐藤和彦「中世の階級闘争と国家権力——農民闘争の転換期を中心として——」『大系日本国家史』2中世（東京大学出版会、一九七五）のち、同『南北朝内乱史論』東京

大学出版会、一九七九）所収）

「付記」 本来ならば、本稿の一、二の認識をふまえて、前稿ならびに、本稿三、四を発表するはずであったが、都合により、発表の順序が前後した。読者の御海容をお願い申し上げる次第である。

（一九八八年一月二十五日脱稿）

年 月 日	署 判 者	宛 所	正 案 (1)	年 号 (2)	文 書 止 (3)	料 紙 (4)	分 類 (5)	出 典
① 応永18・8・3	（黒田）源勝・（小河）玄助	渋谷三郎左衛門入道	○	○		×	A	離宮八幡宮
② 29・2	沙弥・左衛門・沙弥	やのゝしやう	○	○			E	東百よ
③ 10・27	貞政・玄助	石野次郎左衛門尉	×	欠	×		D	天竜寺重書目録乙
④ 30・5・3	貞政・玄助	大国三郎左衛門尉	×	○			D	伊和神社
⑤ 9・20	（浦上）信祐・玄助	当所政所	○	異筆	×	×	E	九条家
⑥ 34・8・29	道観・玄助	矢野東寺方政所	○	○	脱	×	E	東百し
⑦ 12・8・24	平頼・貞継・（橋橋）伊高	なし	×	○			E	東百半
⑧ 35・1・24	信祐・玄助	小右長門入道	○	○	×	×	A	九条家
⑨ 2・23	了政・玄助	後藤次郎左衛門尉	○	○			E	東百テ
⑩ 正長1・9・3	沙弥了政・沙弥（玄助）	石造庄本所政所	○	○	△	○	E	久我家
⑪ 永享1・11・6	左衛門尉（信祐）・沙弥（浦上珪寿）・沙弥（伊高）	本所政所	○	○	△	○	E	九条家
⑫ 3・10・4	信祐・珪寿・伊高	蔭山庄当所沙汰人	×	○	△	×	E	九条家
⑬ 11・26	信祐・珪寿・伊高	蔭山庄名主沙汰人	△	欠	×		E	九条家
⑭ 7・3・6	誠言・景貞・玄助	島津加賀守	×	○	△	×	D	東百く

天竜寺重書目録乙